

細菌・ウイルス感染や癌などから身体を護る免疫システムは自律神経と密接な関わりを持つことから、過剰なストレスは免疫力の低下をもたらし、病の原因となることは良く知られている。

一方、臓器移植においては、この免疫力を抑制しなければならぬ。なぜなら他者から提供を受けた臓器は非自己であるから、生体はこれを異物として認識し排除しようとするためである。

一卵性双生児かそれと同等の組織適合性の組み合わせでなければ、移植された臓器に存在する不適合の同種抗原に対する免疫応答が必ず起こる。

我が国において脳死下の臓器提供による心臓などの臓器移植が可能になったのは11年ほど前であるが、腎臓移植についてはそれよりも20年以上前から行われてきた。

腎臓は正常では1人に2個あるため、死体からの臓器提供に限らず、家族からの提供も可能である。また、仮に移植が成功しなかったとしても、人工腎臓による血液透析に戻ることができるというのでも腎臓移植の発展の大きな理由である。

免疫抑制が重要な臓器移植

安尾美年子

そして腎臓移植の普及のためにはなくてはならないものは、免疫抑制剤の開発であった。近年では優れた薬剤のおかげで、適合性が非常に悪い組み合わせであっても、さらにはABO式血液型が不適合であっても移植腎が生着するまでになった。

免疫抑制剤もかつてのように、免疫を全て抑制するわけではなく、適合性の程度や拒絶反応の種類などにより、特定のリンパ球にだけ作用するものが各種使用されている。しかし、長期的にみて、このような薬剤が身体的にどのような影響を及ぼすのかがわかるのはまだ少し先である。

いずれにしても、薬剤をなるべく使わないのが理想的であるから、免疫抑制のための免疫療法ともいえる研究が進められている。癌の治療のための免疫療法は、免疫を増強するのが目的であるが、体外で調整された免疫細胞が効果を現す人とそうでない人、薬剤についても同様である。結局は個々の生命の複雑な差異によるとしか言えない。

(やすお・みねこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)